

まぼろしの小さい犬

ピアス作

猪熊葉子訳



933 Pearce, Philippa.
(NDC)

まぼろしの小さい犬

ピアス作 猪熊葉子訳
学習研究社

247P 図 19cm

学研ベストブックス

検印廃止

学研ベストブックス
まぼろしの小さい犬

訳 者・猪熊葉子

発行人・渡部ひろし

編集人・石井和夫

印刷所・壮光舎印刷株式会社

・株式会社金羊社

製本所・加藤製本株式会社

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台 4-40-5 〒145

振替 東京 8-142930

©1976

5101

この本についてのお問い合わせは、下記あてにお願いします。

文書は、東京都大田区上池台 4-40-5 (〒145)

学研ユーザー・サービス部「児童図書係」

電話は、東京(03)720-1111(大代表)

まぼろしの小さい犬

ピアス作

猪熊葉子 訳

アントニイ=メイトランド 画



学研ベストブックス

A DOG SO SMALL

by Philippa Pearce

Original English Edition published
by Penguin Books Ltd, Middlesex, England
1962

Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

1970 ©

訳者紹介

1928年，千葉県生まれ。聖心女子大，同大学院を卒業。1957年から58年にかけて，イギリスのオックスフォード大学に留学して，イギリス児童文学を研究。現在，聖心女子大助教授として，児童文学の講座を担当。おもな翻訳書に『雲の森の少年』（学習研究社），『緑の国のわらい鳥』（大日本図書），『トムの塔』（学習研究社），『太陽の戦士』（岩波書店）がある。

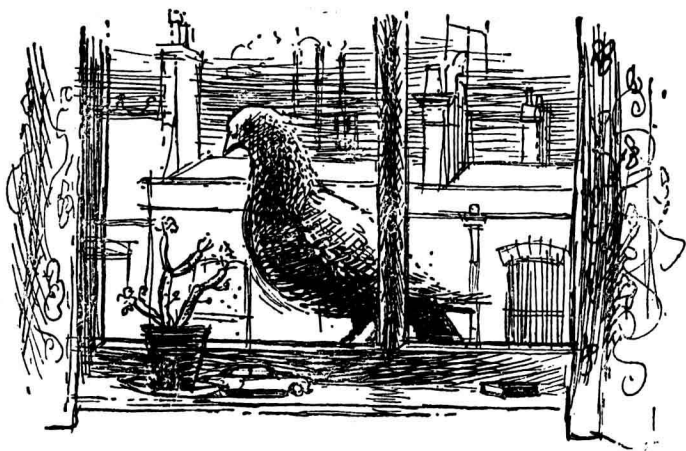
装丁

中地 智

もくじ

第1章	誕生日の朝早く	5
第2章	ガラスのうしろの犬	16
第3章	口に出せないことのかずかず	26
第4章	リトルバーリーまではとまりません	40
第5章	ティリーといっしょに	58
第6章	約束と虹	71
第7章	ひとつのおわり	84
第8章	ひとつのはじまり	95
第9章	オオカミは何百匹と死ぬ	101
第10章	ロンドンの犬	115
第11章	クリスマスイブの事件	127
第12章	フィッチおじいさんのささやき	145

第13章	保養の旅 ほようの旅	162
第14章	雨のなかの小屋 こや	175
第15章	犬はやっぱりだめた……	183
第16章	丘 おか からのながめ	195
第17章	ほんとに聞きたいことは	207
第18章	汽車のなかでは口輪 くちわ がいるよ	221
第19章	ブラウン	233
あとがき		244



第 1 章

たんじょうび 誕生日の朝早く

窓^{まど}ガラスをコツコツとうつ音で、ベンは目をさました。それまではぐっすりと寝^ねていたのに、その音ですっかり目をさまされてしまった。ハトはきつと、けさみたいによっぽど早くから窓をつつきはじめるのだろう。毎朝^{まいあさ}男の子たちが目をさますと、もうコツコツやっているのだったから。しかし、男の子たちが起きるのは、ふだんはもっとおそかった。もうあたりがすっかり明るくなり、階下^{かいか}から朝ごはんのしたくをするにおいがただよってくるころだった。

この早朝^{そうちよう}は寒^{さむ}く、うす暗^{くら}く、なんのにおいもしなかった。ポールとフラン

キーはまだねむっていた。しかしベンは、いったん目がさめてしまったとなると、もう一刻もベッドのなかでぐずぐずしていることができなかった。ベッドをぬけだすと、窓のところにいった。

「おい。」

ベンはガラスごしにそつとハトによびかけた。しかしいつものえさをくれる子ではないことを知っているハトは、うたがわしげな身ぶりで窓台のはしへとうつつていった。

窓台はいつも、ハトのふんでまっ白だった。——毎朝、子どもがハトにえさをやっているとは知らないベンのおかあさんは、ハトというのは、よばれもしないのによってくる手におえない動物だ、といっていたが、ハトのほうではちゃんとこころえてやってくるのだ。

空はきたならしいも色がかった黄色をしていた。ロンドンにおとずれた夜明けは、いま何千というくたびれた街燈のあかりとたたかっているところなのだ。小鳥たち——ハトやスズメやムクドリたちは、もう目をさましていた。でもまだひとつこひとり見あたらないう通りは、いかにもがらんとして見えた。ベンは、もう一刻たりともベッドのなかにはいられなかった——寝室にも、家のなかにもいたくなかった。いまから、郵便が配達されてくる朝ごはんまでの時間を、なにかしてつぶさなくてはやりきれないという気持ちだった。

ペンはいそいで服を着ると、寢室を出ていった。あとのふたりはまだ目をさまさず、ハトはまた窓をコツコツつきはじめていた。ペンはそつと階段の踊り場へ出ていった。両親はまだねむっていた。おとうさんはいびきをかいていたが、おかあさんのほうは静かだった。おかあさんのブリーツ夫人が目をさましたとなると、たちまちやわんやさらだの、スプーンや茶筒だの、どびんや電気湯わかしだのがコトコト音をたてはじめるのだ。お茶がはいると、ブリーツ夫人は夫をゆり起こす。すると、それまで家じゅうにとどろきわたっていたおとうさんの大いびきがやむ。それで、ブリーツ一家の一日が、ほんとうにはじまったことがわかるのだ。

ペンは両親のへやの前をとおりぬけた。つぎは姉たちのへやだった。ペンは前よりもっと用心した。

メイがデイリスに話しかけていた。メイは半分は夢うつだったし、デイリスときたら四分の三くらいは寝ぼけていた。しかし、それでもこのふたりのおしやべりにはいっこうさしつかえなかった。いちばん年上のメイは、来年早々にチャーリー・フォレストと結婚することになっていた。それで、メイといくつも年のちがわないデイリスが、その花嫁のつきそい役をとめることになっている。そこでふたりは、式のこととか贈り物のこと、あるいは、三つぞろ

いの家具や金具かなぐおおいのついたカーテン、せっかく機きなどで新家庭しんかていをととのえることなどを、話しあっているところだった。

「ねえ、新聞の写真しんぶんでよく見るような結婚式けつこんしきにしたいわ。つきそいの女の子と、それにお供役ともやくの男の子もひとりつけてね。」

と、話はまたメイのおこのみの最初さいしよにもどっていった。

ベンはよくよく注意ちゆういしながら、ゆっくりしたしのび足ですすんでいたから、つい、ぬすみ聞きすることになった。ふたりは小さな男の子のつきそいが、花嫁はなよめの衣装いしやうのすそをもっているのはかわいらしいものだとか、フランキーにはその役はどうかしら、小さな男の子だという点ではほんとにびたりなんだけど、——もっとも、もうちっともかわいらしいとはいえないけど、それに、その役をひきうけさせるのだったら、うまくいくるめなければならぬし……などといっていた。

えっ、フランキーだって？——ベンはまゆをつりあげた。しかし、そんなことはベンの知ったことではなかった。ほかの日ならともかく、まして、けさはそんなことはどうでもよかった。ベンはしのび足ですすんでいき、階段かいたんをおりると、家を出た。注意しながら玄関げんかんのドアをうしろ手にしめた。そこではじめて、かなり大きな声でベンはいった。

「きょうはぼくの誕生日なんだぞ。」

そのあいだに窓台まどだいのはしっこにきていたハトは、ベンを見おろしたが、その声にめんくらった。

「やあい、いまに見てろよ。」

ベンはハトのほうを見あげていった。

ベンはだまった。たとえボールのハトにだって、通とおりにだれもないからって、それに、誕生日じよびの郵便物ゆうびんぶつがもうすぐとどく時間だからって、口をきくことはないのだ。

フィッチおじいさんが、ベンに約束やくそくしてくれたのだ——そう、約束してくれたのも同じなのだ、誕生日には犬をやろうと。

それはもうだいぶ以前いぜんのことだが、ベンがおじいさんおばあさんの家にいついたときのことだった。ベンが、おじいさんのところの犬のティリーと遊んでいるのを見て、おじいさんがとつぜん、こういったのだ。

「どうだい、ひとつ、おまえも犬を飼かうってのは？　こんどの誕生日にあげようかね？」

おじいさんは、ふしくれたった手を口にあててそっといった。おばあさんときたら、すごい地獄耳じごくみみなのだ。

おばあさんは犬をきらっていた。ティリーでさえもいやがっていた。そこでペンは、おじいさんにむかって「うん。」と息^{いき}だけでこたえ、おじいさんはよしよし、とうなずいてみせたのだ。ふたりには、それだけでじゅうぶんだった。

もちろんそのうちにはおじいさんも、おばあさんを承知^{しょうち}させるために、話をしなくちゃならないだろう。そのあとで、ペンはほしい犬を手にいれればよいのだ。それには、いろいろこまかな心づかいや考えがいろいろのだから、そうてっとり早くはいかないかもしれない。

ペンはそういう事情^{じじよう}をすっかりのみにこんでいた。だから、毎週^{まいしゅう}おかあさんのところにくる手紙のなかに、犬のことが書かれていなくてもべつにおどろきはしなかった。おばあさんの手紙はおじいさんが代筆^{だいひつ}をした。できることなら、おばあさんは自分で手紙を書きたかったろうが、あいにく関節炎^{かんせつえん}になやんでおり、ペンをちゃんと持つことができなかった。そこでいつも、おじいさんがひどくゆつくりと、読みにくい字で代筆^{だいひつ}するのだ。

おばあさんはまず、お天気^{てんき}のことを書くようにおじいさんにいつけた。それから、家族^{かぞく}のことがつづいた。フィッチ老夫婦^{ろうふうふ}には、ブリューイット夫人^{ふじん}のほかに、六人の子どもが生きのこっていた。それぞれに成人^{せいじん}して、結婚^{けっこん}し、子どもがいた。それでおばあさんが、その子どもたちのことを話しおえるころには、もう犬のことなんか書く余地^{よち}はなくなってしまうというわ

けだった。

それにおじいさんは、ペンをもつのは苦手にがてだったから、手紙を一通書きおえるころには、指はこわばり、しっかりとにぎったペンをあやつるのに、くたびれはてしてしまうのだ。ペンはそのようなことを自分によくいい聞かせ、おじいさんはあの約束やくそくをわすれたわけでも、やぶるつもりでもないと思しんじていた。

ペンはもうこれで何か月も、犬のことばかり考えつづけてきた。どんな種類しゅるいの犬にしろ、まだもらっていないうちは、えりごのみはすきかってというものだ。アルザシアン、グレートデーン、マスチーフ、ブラッドハウンド、ボルゾイ……ペンは公共図書館こうきょうとしょかんから借りだした犬の本のなかから、いちばん大きくて、すばらしいのをえらびだした。

さて、ペンはこの朝は、テムズ川のほうへ歩いていった。家からはかなりの距離きょりだったが、散歩さんぽにはもってこいだった。橋はしのらんかんごしに、ひろびろとしたけしきながめられる。こんな大きくひらけたロンドンのけしきながめられるのは、ペンの住んでいるあたりではここだけだった。とても大きな犬のことを考えているときには、ぜひともこのような雄大ゆうだいながめが必要ひつようなのだ。

ペンは自分の家のある裏通りうらどおから、もうひとつの裏通りにおれ、それから表通りおもてどおに出た。ま

だ車はほとんどおらなかつた。それでベンは、やすやすと道をわたることができた。ベンは道の両^{りょう}がわをきびきびと見てからわたつたが、心はうわのそらだつた。

ベンの心は、もう早朝^{そうちよう}のロンドンをはなれて、夜のダートムーア（イングリランド南西部の高地地帯。コナ舞台となつたところを探偵シヤロック^{シャーロック}ホームズが活やくする）にむかつていたのだ。あの夜の荒野^{こうや}に、バスカビル^{リョウケン}の獬^{リョウケン}犬^{けん}（ブラッドハウンの追跡などに活やくする）が空に低^{ひく}くかかる満月^{まんげつ}を背に、くろぐろとしたシルエツトになっている。おそろしい犬の目が、シャーロック^{シャーロック}ホームズのすがたにじつとそそがれている……。

しかしベンは、逃亡^{とうぼう}犯人^{はんじん}でもないなければ、ブラッドハウンドのことはあまりうまく想像^{そうぞう}できなかつた。それじゃあ、けさはブラッドハウンドはやめておこう。

ベンの歩いていた道が大きくまがると、川にかかつた橋が見えてきた。いいふるしたじょうだんを、ブリーイット家^けの人たちがいまでもときどきむしかえすのがこの場所^{ばしょ}だ。そのじょうだんというのは、ベンがちびなのをからかつてのことだが、このさきベンが、一メートル八〇センチくらいに背^せがのびても、まだ、このじょうだんをむしかえすだろうかと、ベンはときどき考える。というのは、その橋のむこうに、れいの国会議事堂^{こっかいぎじどう}の「大きなベン」とよばれる大時計^{おおどけい}ビッグ・ベン（製作者のベンジャミン^{ベンジャミン}ホ^ホ）が、そそりたっているからだつた。

ベン^{ベン}ブリーイットは、あいかわらず犬のことを考えていた。アイリッシュウルフハウ

ドがいいかもしれない——しかし、犬の本にはひどくあらつぽく、ひどく悲しげな顔つきをしてうつっていた。もしオオカミを相手にまわすのなら、ほんとにはボルゾイがいちばんなんだが……。

橋をこえてロンドンの中心部にむかう車の数は、わずかずだがふえており、通行人もちらほらふえてきていた。ベンは山高帽をかぶり、黒っぽい背広を着、折りかばんをかかえている男に追いつかれた。トゥーティングから、市中のオフィスにかよっているこの男は、八時半には、自分の机の前にすわりたのだった。この独身の男は毎朝そうしていたのだ。

仕事にいく男は橋の上でベンを追いかけていった。ベンが橋のまんなかでたちどまった。そしてらんかんひじをつき、ロンドンの中心をながれているこの川の、おどろくほどの長さと幅を感じながらながめていた。この川のひろびろしたながめをさえぎるものといえば、水をひたして大きく川をまたいでいるいくつかの橋だけだった。

ベンがここへやってきたのは、このけしきを見るためだった。この川のひろがり、ボルゾイのふるさと、あのロシアのとうもろくろい荒野を想像するのにふさわしかった。ベンは学校でロシアのことをならった——ロシア人は朝ごはんになにを食べるか、そしてどんな農機具をつかい、その土地にどんな作物をつくるかなどを。しかしベンは、そんなことにはたいし

て興味を感じなかった。

おとうさんは、新聞でロシアについて読む。そして、読みながらテーブルをたたいたりする。ボールとフランキーは、ロシアの宇宙旅行のことを読む。しかし、ベンにとってのロシアは、そのどちらともちがうのだ。

ベンの思いえがくロシアの国は、いつも光りかがやく雪にうもれていた。大地はたいらで、見たすかぎり純白だった。オオカミどもが昼間のうちひそんでいる、くろぐろとした林がそこそこにある。夜になるとオオカミどもはいだしてきて、獲物をもとめてほえるのだ。

ベンの思いえがくのは昼間のロシアだ。まず、そりを雪のなかにひきだして、おきざりにしておく。その一つ一つには、雪と見わけがつかないように、まっ白な毛布がかぶせてある。その毛布の下には——いや、待てよ、もう、馬に乗った男たちが、ちかくの林を攻めているぞ。オオカミどもがとびだしてきた。そしてまっしぐらに、そのあいだをかけぬける。と、そのなかにかくれていた男たちが、ぱっと毛布をはねのけるや、二匹一組のボルゾイ犬ときなす。なんて、なんてすばらしい犬たちだろう！ 犬たちははねながらオオカミを追っている。

オオカミははい。しかしボルゾイは、足のははいグレーハウンド種のからだをもっている。

からだはしなうように細く、スピードの出るように流線型につくられている。オオカミはたしかにただけしいが、ボルゾイだって勇敢で強いのだ。ボルゾイはオオカミにせまっていく。一匹のオオカミの両がわにそれぞれボルゾイが食いさがり、獵師が短剣をもってとどめをさしにやってくるまで、がんばっている。――

ここまでで、ベンの想像はいつもおしまいだった。どのみちオオカミが手にはいるわけでもなし、そうかといって、想像のなかで殺してしまうのもいやだったからだ。

ところで、それはそれとして橋のずっとむこうから、ビッグ・ベンの丸い顔がいきなりかたりかけてきて、いま七時半だとベンにつげた。ボルゾイをあやつってオオカミ狩りをするのに、ずいぶん時間がかかってしまった。ベン・ブリューイットは川からきびすをかえし、朝ごはんを食べに家にむかった。

もう、朝の郵便がとどいているかもしれないということに気づくと、ベンはかけだした。